【佳作】

イスラム教徒はテロリストなのか

西洋のイスラム認識をめぐって

次田 晴香 岐阜大学地域科学部1年

要旨

本レポートは、イスラム教徒に対する西洋の認識と、認識が形成される過程について 考察したものである。イスラム教徒とテロリズムに関係性について、またイスラム教徒 という存在について、西洋を含めた私たち自身が持つ固定観念や認識に疑問を抱き、実 際のデータや文献からイメージと事実の違いを導き出した。

キーワード:イスラム,テロリズム,メディア,多様性

1. はじめに

日本ではイスラム国 (IS) による日本人人質殺害事件の後、イスラム教徒に対する考え 方が大きく変化したように感じられる。実際的に日本人が被害を受けたこと、またイスラ ム国がテロの対象として日本を上げたことが、日本人にとって対岸の火事であった問題に ついて注目が高まった理由の一因であるだろう。

いま世界ではイスラム教とテロは結び付けて考えられることが多い。しかし本当にイスラム教とテロを結びつけて考えてしまってよいのだろうか。なぜイスラム教徒によるテロばかりが宗教的な問題として取り上げられやすいのだろうか。筆者は高校時代にイスラム教研究を行っている教授からイスラム教がもつ多様さ、考え方を聞き、現在のイスラム教徒に対する世界の考え方に疑問を感じた。

また Pew Research Center 公式ホームページによると、2070 年にはキリスト教徒数とイスラム教徒数は肩を並べ、2100 年にはイスラム教が世界の宗教の最大勢力となると推測されている。(⑤) イスラム教徒に対する不和はこのまま放置しておいてよい問題とはいいがたい。

本レポートでは上記の問題提起に対する答えを模索するとともに、私たちが当たり前のようにもっている固定観念の破壊に挑む。

2. 実態

上記で述べたようにイスラム教とテロが結び付けられて考えられてしまうことは多い。 近年においては、ヨーロッパ諸国で行われるイスラム教徒によるテロの報道が過熱しており、日本でもよく目にする。では実際イスラム教徒はどれほどテロを行っているのか。この疑問を明らかにするためにイスラム教徒が欧州とアメリカで実際にテロを起こしている割合を調べた。

欧州警察機構の報告によると、以下の図からわかるように、2009 年から 2013 年の 5 年間にヨーロッパで起きたテロのうちイスラム教徒による犯行は 2%である。欧州のテロの大半は分離主義グループによるものであり、イスラム教徒によるテロは全体から見ると少数であることがわかる。

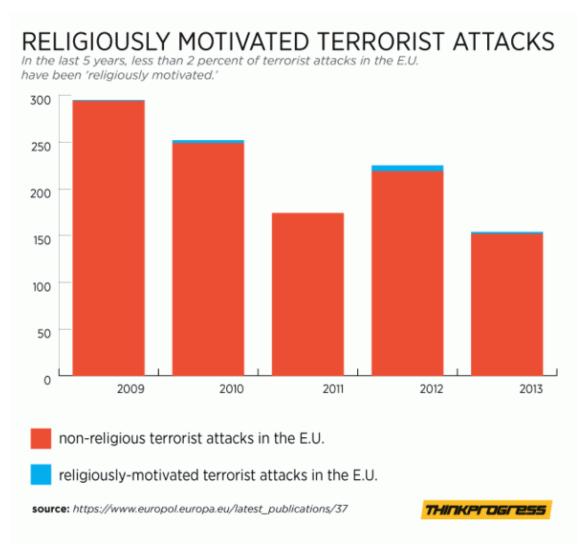


図1 欧州における宗教的理由でのテロリストの割合

(出典: ⑧Less Than 2 Percent Of Terrorist Attacks In The Are Religiously Motivated)

同様にアメリカの場合も見ていく。連邦捜査局 (FBI) 報告によると,以下の図からわかるように,アメリカ合衆国で1980年から2005年の間で起きたテロのうちイスラム教徒が起こしたテロは6%に留まっている。それよりも南米系移民のほうがずっと多くテロを起こしているのである。

アメリカで1980年~2002年の間に テロを起こしたグループの割合

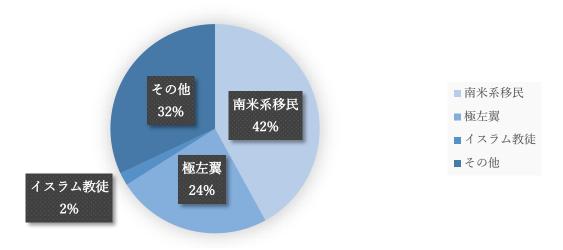


図2 アメリカでのグループ別テロの割合

(出典: ⑩Terrorism 2002/2005)

以上の結果から,欧州とアメリカにおいてイスラム教徒が起こしているテロ件数は,人々がイスラム教徒とテロを深く関連付けるほど多いとは言えないことが分かる。

3. メディア

イスラム教徒が行ったテロの実際数と認識の間に齟齬が生じている原因のひとつはメディアにある。

イリノイ大学 Travis Dixon 教授がおこなったサンプリング調査によると、2008 年~2012 年の 5 年間に米国内で報道されたニュースのなかで、米国内のテロリスト容疑者の報道の 81%がイスラム教徒に関してのものであったのにもかかわらず、この期間の国内でのテロリスト容疑者のうちイスラム教徒であるとされたものはたった 6%であった。(②)つまり

イスラム教徒はテロリストなのか

は、イスラム教徒によるテロが実態よりも多く人々に認識されたのである。

その一方で、テロリスト側もメディアを利用している面もある。2017 年 10 月 1 日に起きたラスベガス銃乱射事件はまだ記憶に新しいと思われる。50 人以上の尊い命が失われ、500 人以上の人々が負傷したこの事件について、イスラム国 (IS) は声明を出し、最高指導者であるバクダディ容疑者の呼びかけに、ラスベガス銃乱射事件の犯人が応じて起こしたテロであるとした。しかし FBI はこの事件とイスラム国 (IS) の関連性は認めていない。 (⑥) イスラム国 (IS) 自身が行っていないテロに対し、自らの立場を強固にし、世界に対し影響力を持つために嘘の声明を出した可能性が高い。

4. イスラム観

メディアがイスラム教徒に対して偏った報道を行うのは、過去に形成されてきた西洋のイスラム観が一端を持つのではないかと考えられる。民衆は自分が属するグループのテロよりも、「他者」であるイスラム教徒によるテロの方に注目する傾向にある。メディアは視聴者に物事に対する印象づけを行うが、メディアもまた視聴者のニーズに応えようとするのだ。

では、西洋世界で形成されてきたイスラム観とはどのようなものなのか。ここでは著名なイスラム研究者であるバーナード・ルイスを取り上げ、西洋のイスラム観の形成について述べる。

4-1. バーナード・ルイス

バーナード・ルイスは西洋でのイスラム観の形成を語る上でとても重要な人物である。なぜならば、彼の著書である『イスラム世界はなぜ没落したか?』はイラク戦争を主導した当時のアメリカの政治指導者たちのイスラム観の形成に多大な影響を与えたからである。(バーナード、2003、監訳者解題、p.3)ネオコンサーヴァティブ(新保守主義者)と呼ばれた当時のアメリカの政治指導者たちに支持されたルイスのイスラム観はアメリカや欧州、そしてアメリカを通し日本などにも流入した。

その重要性は、政治学者サミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」という論文の中でのイスラム・中東世界への理解が、ルイスに依拠していることからも察することができる。ハンチントンの同論文は、アメリカの対外政策や国際関係に大きく影響を及ぼすアメリカの外交評論誌『フォーリン・アフェアーズ』に掲載された。その際、ハンチントンはイスラム研究者ではないので、イスラム教の理解をルイスに依拠したのである。つまり、ルイスが語ったイスラム・中東世界が、そのままアメリカの対外政策へと深くかかわっているような形となったのだ。

同書のタイトルである『イスラム世界はなぜ没落したか?』という問いに対し、ルイス から与えられる答えは、「イスラム教に固執し、西洋世界の文化や文明を受け入れること

平成29年度 岐阜大学学生レポートコンテスト入賞作品

が無かったから」というものである。中東世界の過去の繁栄を褒めたたえつつ、「中東、いやそれどころか全イスラム地域において、実際のところ事態はかなりまずくなってることが二〇世紀中には明白になった。千年来の競争相手であったキリスト教世界に比べ、イスラム世界は貧しく、弱体化し、無知になり果てていた。」(ルイス、2003、p.240)とイスラム世界を痛烈に批判した。ルイスは特にイスラム教とキリスト教を比較し、女性の地位や権利、宗教的寛容さ、政治体制について述べている。そしてそのいずれも、イスラム教はキリスト教に敵わないという論調で進んでいく。終章においては、イスラム世界をひどくこき下ろし、イスラム世界の没落を非常に激しい言葉で語るのである。

「経済発展,雇用創出,識字能力,教育的・科学的業績,政治的自由,人権尊重など,近代世界で重要なすべての基準からいって,かつて一個の強大な文明であったものはたしかに没落してしまったのである。」(ルイス,2003, p.241)

イスラム教はキリスト教に敵わない、西洋世界に東洋世界(ここでいう東洋は日本や韓韓国などの極東ではなく中東をさす)は敵わない。それはイスラム教が西洋世界を受け入れることのないよく分からない「他者」であるからだ―――このようなイスラム世界に対する考え方をルイスは提示しているのだ。

しかし、本当にイスラム世界は没落したのだろうか?そもそも「没落」したとする「近代世界で重要なすべての基準」を決めたのは西洋である。勝手に基準を作り、勝手にイスラム世界は没落したと述べるのはいささか身勝手が過ぎるのではないか。

そしてもう一つ、ルイスはイスラム教徒をまるでひとかたまりの強固な集団のように述べているように感じる。そのような意図がなかったとしても、おそらくメディアなどを通し彼のイスラム観が西洋世界に流布したときには、分かりやすく「イスラム教徒、ムスリム」はみな同じように敬虔なイスラム教信者として捉えられたのであろう。

ここに大きな問題が生じる。そしてその問題を論じるにはもう一人の人物について述べなくてはならない。

4-2. エドワード・サイード

そのもう一人の人物であるエドワード・サイードは 1935 年(イギリス委託統治下のパレスチナ)に生まれ、幼少期を過ごしたカイロではアメリカン・スクールであるセント・ジョージ校に通った。アメリカの大学で比較文学教授として経歴を築き、順調な生活を送っていた。しかし 1967 年、アラブ・イスラエル戦争(第三次中東戦争)が勃発する。彼の人生はそのとき一変した。彼は突然、自分のいる環境が、アラブ人やアラブ思想やアラブ国家を憎悪するものへと変わったことに気づく。周囲はイスラエルの見方ばかりとなり、それまで築き上げた経歴は顧みられず、アラブ人は差別・憎悪の対象となり、彼自身も部外者扱いされ、標的となった。1967 年の紛争とその後のアメリカでの立場の変化によ

イスラム教徒はテロリストなのか

りサイードは自身の存在の逆説について深く考え始める。(アシュクロフト, アルワリア, 2001, p.11)

サイードはアラブ人でありながら、イスラム教徒ではなくキリスト教徒なのだ。西洋世界の価値観を知り、同時にアラブ人であるから西洋世界の差別や偏見を受けた彼が考える 西洋世界のイスラム観の形成は、私たちが今持つ西洋的なイスラム観の問題点を炙り出す。

エドワード・サイードの名を広く知らしめた彼の代表作は、『オリエンタリズム』 (1993) である。西洋と東洋。支配する側とされる側。「彼はこの書で、欧米人が抱いているオリエント像を批判的に分析し、そこに潜む知識と人種主義、思考方法と植民地主義の密着した構造を、ミシェル・フーコーの方法論的影響を受けて明らかにしようと試みた」 (ルイス、1982) のだ。

サイードは『オリエンタリズム』のなかで、以下のように主張している。

ヨーロッパのオリエントに対するものの見方、考え方は、「西洋」と「東洋」が本質的異なっているという前提で生まれ、「西洋」の人々にとって「東洋」は、未知のものであり、遠くのものであり、敵であった。人間精神は、未知で曖昧な存在を一定のイメージや言葉で自らが把握可能なものにしようとし、それらがヨーロッパの伝統の中で次第にオリエントに対する特定のイメージを形成していった。そのイメージは西洋の人間がオリエントを見るときの指標となり、一方でオリエント研究の発展に伴ってオリエントに関する画一的な権威へとも成長した。オリエントについて述べる人間が、過去に書かれた文章を引用することで、ますますこの権威は強化され、実際にオリエントを訪れる人間も、現実のオリエント社会より権威を信じた。

そうしてオリエントに住む人間は、一個人である以前に「東洋人」「アラブ人」「イスラム教徒」といった枠組みに捉えられ、オリエントそのものも一般化され、性質を割り当てられた。(サイード、1993、p.346、p.347)

サイードはさらに,「イスラムは統治された一枚岩ではなく多様な内部構造を持つが, 西洋世界がそれらを無視し,『イスラム』というひとことでくくることにより,その文 化,アラブ人,ムスリムは暗黒の,奇怪なものとして認識されてしまう」と述べている。 これこそがサイードがもっとも恐れていることの一つであり,ルイスによるイスラム観の 形成過程で起きてしまった問題なのである。つまり,西洋世界はイスラム教徒をまるで強 固な一枚岩のように考え,イスラム教徒が起こしたテロはイスラム教徒の総意のように受 け取ったのである。

しかし実際にはそんなことはありえない。サイードが述べたようにイスラム世界は本当に多様なのだ。厳しい戒律を守りきちんとメッカに1日5回祈りを捧げるイスラム教徒もいれば、豚肉を食べるイスラム教徒だっている。サウジアラビアのように女性が車の運転を許されていない(法律で禁じられているのではなくシャリーアによって禁じられている)国もあれば、トルコやパキスタンのように女性のリーダーが選出された国もある。女

平成29年度 岐阜大学学生レポートコンテスト入賞作品

性が教育を受けることが困難なイスラム圏の国もある(⑦)一方で、私たちは岐阜大学で スカーフを被ったイスラム教徒の女性を見ている。

ルイスが「イスラム世界は没落した」と述べられるほど、イスラム世界は一つのものではないのである。

オリエンタリストは東洋世界のイスラム教徒に対して、西洋側からの勝手な「イスラム教徒」イメージを押し付けてしまった。必ずしもそのイメージすべてが間違っているのではない。しかしすべてのイスラム教徒に共通するようなイメージは存在しないし、どんなイメージであってもイスラム世界のすべてを表すことは不可能である。

5. おわりに

本レポートの執筆を進めるにつれて、イスラム教とテロが結び付けられる原因が、自身が考えていたよりもずっと複雑で難しい問題であると理解した。そしてイスラム教徒とテロの実態を調べると、事実と私たちが持つ認識の間には大きな齟齬が生じているのだと知った。

その根底にあるイスラム観の形成にあたっては、イスラム世界について多くの研究者や 識者が様々なことを述べており、そのなかで激しく対立が起き、ひとつとして全く同じ考 えはない。私自身、正しさがどこにあるのか分からなくなった。

そのような混沌としたレポート執筆のなかで、私がただひとつだけ伝えたいと思ったのは「イスラム教徒は特別な人々の集団ではない」ということである。そしてこれが「なぜイスラム教だけがテロと結び付けられるのか」という問いに対する答えになるのではないかと考える。現実的な未来、イスラム教が世界の最大勢力となったとき、私たちはまだイスラム教徒とテロを結びつけて考えるだろうか?きっとそうではない。いま、イスラム教徒以外にとってイスラム教がマイノリティであり、特別な「他者」であるからこそ、私たちはイスラム教徒を分かりやすく、できるだけ簡単に理解しようとしてイスラム教徒、およびイスラム世界の一面、この場合はテロというネガティブなものと結び付けるのだ。その一端に本レポートで述べたような西洋によるイスラム観の形成やメディアによる影響があったのだろう。

サイードが述べたように、イスラム教の内部構造は多様であり、一枚岩ではない。それは他の宗教や物事でも言えることであり、一括りにして考えようとすることは常に誤解を招く危険性を持つ。今後、日本の少子化が進み、海外移住者が増える可能性は存分にある。その時、大きな問題が起こる可能性を未然に防ぐためには、メディアや識者の役割が重要となる。そして私たち自身もよく理解できないものを、「他者」として大きな枠組みで捉えないように注意していくべきである。

イスラム教徒はテロリストなのか

【参考文献】

臼杵陽(2009)『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社。

エドワード・サイード 今沢紀子訳(1993)『オリエンタリズム上・下』平凡社。

川上泰徳(2016)『「イスラム国」はテロの元凶ではない グローバル・ジハードという 幻想』集英社新書。

サミュエル・ハンチントン 鈴木主税訳 (1998) 『文明の衝突』集英社。

バーナード・ルイス 臼杵陽監訳 (2003) 『イスラム世界はなぜ没落したか?』日本評論 社。

バーナード・ルイス 福島保夫訳 (1982) 『オリエンタリズム論争 I 』みすず 268 号。藤原和彦 (2001) 『イスラム過激原理主義 - なぜテロに走るのかー』中公新書。 ビル・アシュクロフト、パル・アルワリア 大橋洋一訳 (2005) 『エドワード・サイード』青土社。

- ① https://longtailworld.blogspot.jp/2015/01/are-all-terrorists-muslims-no.html 『「テロリストは全員イスラム教徒」の嘘を数字で検証: Are All Terrorists Muslims? No』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ② https://irorio.jp/kamejiro/20150109/194541/『イスラム教徒による犯罪のテレビ報道,発生率のわりに高めー米調査』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ③ http://www.huffingtonpost.jp/2016/09/11/september-eleven-fifteenth-aniv_n_11961252.html 『9.11 同時多発テロから 15 年 イスラム教徒への偏見と憎悪はまだ続いている』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ④ http://www.huffingtonpost.jp/kanta-hara/islam-population_b_11670906.html『なぜ若者はイスラム過激派に走るのか イスラム世界の人口爆発と過激派の台頭』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ⑤ https://www.nikkei.com/article/DGXLASGM04H0I_W5A400C1EAF000/『イスラム教徒,2100年には最大勢力 世界の宗教人口予測-日本経済新聞』最終閲覧 2018年1月30日。
- ⑥ http://www.sankei.com/world/news/171003/wor1710030011-n1.html『「イスラム 国」が新たな声明 最高指導者の「呼びかけに応じた」と主張』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ⑦ http://honz.jp/articles/-/44275『ボコ・ハラム イスラーム国を超えた「史上最悪」の テロ組織』地域型武装組織から国際テロ組織への変貌』最終閲覧 2018 年 2 月 3 日。
- ⑧ https://thinkprogress.org/less-than-2-percent-of-terrorist-attacks-in-the-e-u-are-religiously-motivated-cec7d8ebedf6/『Less Than 2 Percent Of Terrorist Attacks In The Are Religiously Motivated』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。

平成29年度 岐阜大学学生レポートコンテスト入賞作品

- ⑨ https://www.csmonitor.com/World/Global-News/2011/0801/Norway-attacks-Was-Breivik-a-Christian-terrorist『Norway attacks: Was Breivik a Christian terrorist?』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ⑩ https://www.fbi.gov/stats-services/publications/terrorism-2002-2005『Terrorism 2002/2005』最終閲覧 2018 年 1 月 30 日。
- ① https://news.illinois.edu/view/6367/204445『Muslims and Latinos much more prominent in TV crime news than in real-life crime』最終閲覧 2018年1月30日。